

## 書評

## オーバーツーリズムから考える「京都らしさ」

## "Kyotones" from the Perspective of Over-tourism

中井治郎 著

『パンクする京都——オーバーツーリズムと戦う観光都市』

(星海社、2019年、新書、192頁 900円+税)

間中 光

追手門学院大学 地域創造学部 講師

Hikaru KENCHU

Lector, Faculty of Regional Development Studies, Otemon Gakuin University

## I. はじめに

2019年12月に第1例目の感染者が報告されて以来、世界の経済・社会はCovid-19の感染拡大によって混乱し、ロックダウンや出入国制限など人の移動を制限することが強く求められた。特に、「自己の定住的圏以外の地域を訪れる」(United Nations Department of Economic and Social Affairs, 2008, p. 10) ことを前提とする観光産業は壊滅的なダメージを受け、日本においても閑散とした観光地の姿や苦境に立たされた観光業者の状況について度々報道がなされた。また、観光研究においても、この観光危機をいかに耐え忍び、回復するのかという議論に加え、これを契機に観光の在り方を再考しようとする議論も盛んに行われた (Yang et al., 2021)。本学会においても、第10回大会シンポジウムの「ライティング・ツーリズム——Covid-19以降の観光研究とは」や、第11回大会シンポジウムの「Covid-19とツーリズムへの問い」をはじめとして、発表や討論において学会員による盛んな議論・検討が見られた。

本書は、こうしたCovid-19の感染拡大前、つまりビフォーコロナの観光の状況について記した書物である。本書が発行された2019年は訪日外国人の数・消費額ともに過去最高を更新し、日本各地がインバウンドに沸き立つ一方で、本書が取り上げる京都は、「オーバーツーリズムと戦う」ことが求められていた。Covid-19の感染拡大はこうした状況を一変させたように見えたが、コロナ禍を経て各種の制限が緩和・廃止された今、「京の観光公害再び 錦市場『買い物困難』嵯峨野線『パンク状態』」(読売新聞, 2023) との報道がみられるように、京

都はビフォーコロナの観光に戻ったようにも見える。

コロナ禍を経て、京都、そして日本の観光の何が変わり、何が変わらなかったのか。ビフォーコロナの観光を読み解こうとする本書は、計らずして「Covid-19とツーリズム」を総括するための重要な参考文献の一つとなっていると言える。

## II. 本書の構成と内容

本書は「我が国におけるオーバーツーリズム最前線である京都の“戦況”」つまり「観光都市・京都が現在、直面する問題を読み解く」(pp. 11-12) ことを目的とし、4つの章と、京都でオーバーツーリズムと向き合う人々を対象に行った5つのインタビューから構成される。

第1章「京都がパンクする!？」では、2010年代のインバウンドブームによって生じた問題について、花街に押しかける舞妓パパラッチや市バスの混雑、地価の高騰や迷惑民泊の存在などその象徴的な事例が紹介される。そして、こうした観光の悪影響は京都のみに生じているのではなく、世界の観光都市に共通するものであるとして、UNWTOの「地域のキャパシティを越えた観光客の増加が、地域住民の暮らしや観光客の観光体験の質に受け入れがたい悪影響を与えている状況」(p. 44) という定義を示しつつ、オーバーツーリズムとしてこれらの問題を捉える必要があると主張する。また、1章に続くインタビューでは、嵐山にある臨濟宗天龍寺の関係者の声が掲載され、外国人観光客によるトラブルや実感する文化の違いなどについて述べられる。そして「お寺というのは本来、観光の場所のための場所ではない」こと、「信

仰と観光。そこをごっちゃにしない」(pp. 56-57) ことが強調される。

続く第2章「日本社会に蔓延する『観光客』ごらい」では、観光される側の京都の人々がいかにして観光客を嫌うようになったのかという点について説明がなされている。まず、日本人観光客の減少と外国人観光客の急増という京都における観光の質の変化が、一部の観光地・交通手段への集中による混雑とマナー違反に象徴される文化摩擦という形で、京都の人々に観光の弊害を実感させる機会を増やしていると指摘する。そして、これが不十分な社会的合意形成・メディアによる「迷惑な外国人観光客」(p. 78) イメージの消費などと重なり、インバウンドへの否定的な見方が形成されていると述べる。こうした否定的な見方は、「観光客には来てほしくない」(p. 86)と語る祇園町南側地区まちづくり協議会関係者へのインタビューでも見て取れる一方で、観光振興と制限を同時にすすめる京都市産業観光局関係者のインタビューも掲載されている。

第3章『『京都らしさ』の正体～観光のまなざしと『古都』化する京都』では、観光から守る対象とされる京都というまち、つまり「京都らしさ」に焦点があてられる。同章では、東京遷都による人口減少によって文化・経済・産業面で危機に立たされた京都が、その克服に向けて、最先端技術の取り込みによって先端都市のイメージを獲得したこと、戦後、大都市としての存在感が低下する中で、国鉄のディスカバージャパンキャンペーンやアンノン族の影響により「京都らしさ」を古都イメージに求める向きが強くなったこと、京都タワー建設以降の景観論争を通じ、京都市民が「京都らしさ」としての古都イメージを内面化・固定化していったことが明らかにされる。そしてその古都イメージの先には、日本人の日常では失われたものが京都にはあるという人々の期待があることが述べられている。この古都イメージと関連するものとして、続く2つのインタビューでは、外国人観光客に真剣での試し切りとサムライ文化をレクチャーするサムライ塾の関係者や、京町屋旅館のマネージャーがそれぞれの京都らしさを語っている。

最終章となる第4章「京都は誰のものか？」において、著者は「テーマパークとしての京都」について論じる。観光のまなざしが「京都らしさ」を自分たちの日常とは異なる風変わりな世界に仕立て上げる一方で、観光客を含めた万人に開かれている場所であることも求めるといふテーマパーク化が京都で進んでおり、それゆえ観光客は無意識に京都の人々や日常生活に「旅の恥はかき

捨て」(p. 176) 的な行動を許容するよう求めていると指摘する。また、インスタ映えに代表される体験より見た目を重視する観光は、その傾向をさらに加速させていると主張する。そして、こうした「観光のまなざしのような外部から与えられた価値の文脈から、そして何より『京都らしさ』から、どのように京都を奪い返すのか」(p. 188) が真のオーバーツーリズムとの戦いであると結論付ける。

### III. 本書の意義——まとめに代えて

本書は、2010年代に生じた国内のインバウンド活況とオーバーツーリズムの発生について、京都を事例に解説・分析したものであり、星海社新書シリーズの1冊として幅広い読者を想定して書かれている。花街・禅寺・京町家といった京都を象徴する場所がインバウンド活況によっていかに変化したのかという点が、現地レポートやインタビューによって具体的に説明されており、オーバーツーリズムの実態を初学者にもわかりやすく伝えることに成功している。また、本書の特徴は、こうしたオーバーツーリズムの解説のみならず、場所イメージという視点から、オーバーツーリズムから守るべき(とされる)「京都らしさ」にも焦点を当てている点にある。著者は、京都の場所イメージとしての「古都」は1970年代以降のメディアによる古都イメージの前景化と、その後の景観論争を通じた市民への内面化の結果によるものであると指摘する。そして、その古都イメージが「京都らしさ」として多くの観光客を惹きつける一方で、その模索は観光主導の「京都らしい」都市づくりにつながっており、こうした京都住民が疎外された都市づくりに立ち向かうことこそがオーバーツーリズムとの闘いである、と主張している。生じている問題のみならず、その背後にある都市をめぐる構造的な課題にも目を向けさせようとする本書のねらいは、オーバーツーリズムを考える上で、それを単なる観光の一側面として捉えるのではなく、まちづくり・都市づくりの中で検討する必要があることを伝えている点で意義を有する。

また、本書に記載されている現地レポートやインタビューを、観光研究の議論と重ねて検討することで新たな問いも生まれてくる。同分野の先行研究が、観光空間のイメージがゲストとホストの交渉の中で生産されること(太田, 1998)、観光という虚構が地域のアイデンティティに代表されるような真正性を獲得する可能性(須藤, 2012)などを明らかにしてきたことを踏まえるならば、

「お寺というのは本来、観光のための場所ではない」(p. 57)「(花街は)観光客が来るようなところではなかった」(p. 85)と怒る京都の人々が思い描く「本物」の京都の姿や、著者が主張するような、観光を含めた外部による価値づけから「奪い返し」た先にある地域主導の京都の姿も、観光という営みと無縁のものであるとは考えにくい。「京都らしさ」という京都の真正性について、観光客と地域住民の交流・交渉の中で捉えてみることも有効であろう。

同様に、京都住民と観光客という二項対立的な枠組みについても、観光研究において、ホスト・ゲストという単純性が生み出すカテゴリー内の均一性や固定的な性質への批判から (Bruner, 2005)、ホスト社会内部の多様性やカテゴリーの流動性を踏まえた研究が進められていることを踏まえれば、「サムライ塾 (pp. 140-145)」「京町家旅館 (pp. 146-156)」など観光業を京都で営む地域外出身者などを事例に、京都住民と観光客という前提を問い直すことも必要である。

このように、本書はオーバーツーリズムに関する入門書としてのみならず、観光研究への誘いの書として、今後も広く活用されることが期待される1冊である。

## 参考文献

- 太田好信 (1998). 『トランスポジションの思想——文化人類学の再想像』 世界思想社.
- 須藤廣 (2012). 『観光化する社会——観光社会学の理論と応用』 ナカニシヤ出版.
- 読売新聞 (2023, 5月23日). 「京の観光公害再び 錦市場 買い物困難 嵯峨野線「パンク状態」」(夕刊) p.1.
- Bruner, E. (2005). *Culture on Tour: Ethnographies of Travel*. University of Chicago. [安村克己・鈴木涼太郎・遠藤英樹・堀野正人・寺岡伸悟・高岡文章訳 (2007). 『観光と文化——旅の民族誌』 学文社.]
- United Nations Department of Economic and Social Affairs. (2008). *International Recommendations for Tourism Statistics 2008*. Retrieved June 20, 2023, from [https://unstats.un.org/unsd/publication/Seriesm/SeriesM\\_83rev1e.pdf#page=21](https://unstats.un.org/unsd/publication/Seriesm/SeriesM_83rev1e.pdf#page=21)
- Yang, Y., Zhang, C. X., & Rickly, J. M. (2021). A Review of Early COVID-19 Research in Tourism: Launching the Annals of Tourism Research's Curated Collection on Coronavirus and Tourism. *Annals*

*of Tourism Research*, In press, doi: 10.1016/j.annals.2021.103313